

はじめに

本書に収めた文章はいずれも「言葉の生理」を扱っている。出会うこと、勉強すること、読んだり書いたりすること、教えること。言葉との関わり方はさまざまだ。そこにどう「生理」や「病」がからむのか。本書のタイトルからは〈病↓癒やし↓再生〉というストーリーが想像されるかもしれない。うまく機能しない言葉が、癒やされ回復し、生き生きとする。一種の再生譚がそこには読み取れるだろう。

もちろん、そうした含みはある。しかし、私が本当に示したいのは、病から生という並びに必ずしも一方向の矢印がないということである。「病」や「癒やし」や「生」はゆるやかに等号で結ばれてもいい。病むことも、癒やすことも、そして生きること、いずれも言葉の貴重であり方だ。どれを切り離しても全体性が損なわれる。これらをすべて視野に収めることでこそ、言葉の働き方が理解できる。

これを、私たちの「今」の状況に置き直して考えてみよう。

言葉が伝わらない、と思うことがある。納得できないことが起きて、「それはおかしい！」と言っても、声が届かない。「こうするべきだ！」と叫んでも誰も振り向かない。フラストレーションがたまる。

言葉を伝えるための方法は発達した。手紙から電話という時代をへて、今や、デジタル空間にはメールからSNS、さらには個人単位のミニラジオ局のようなものまで、次々に新しい装置が生み出されてきた。

それでも伝わらない。届かない。何とかならないか、と思ってしまう。

何とかしたいのはみんな同じなのである。しかし、どうすればいいか、というところで意見が分かれる。

一方にはこういう見方がある。

「簡単だ。ちゃんとコミュニケーションの方法を勉強すればいい。正しく伝わるようにすればいい。言葉の技能を磨け」

なるほど。もっともな意見だ。こうした意見が社会では多数派なのかもしれない。しかし、ある程度、言語活動のことを考えてきた人なら気づくかもしれない。実は、言葉の失敗は日常茶飯事なのである。うまくいく方が珍しくらい。完璧なコミュニケーションなど、絵に描いた餅にすぎない。言葉が伝わらないのはあたりまえなのだ。

だから、昔から人は暴力・武力に頼って他者に言うことを聞かせようとしてきた。その後、人類は少しだけ賢くなり、力に訴えるかわりに、言葉を上手に伝えるための方法や、そのため

の装置を開発した。そんな中でとりわけ重要だったのは、「相手の言葉を勉強する」という方法を発見したことだった。「相手の言葉」とは外国語であったり、新しい探求の方法であったり、敵対する人物の論法だったりする。あるいは、非常に独特な感性や感情だったりする。そこには見知らぬ文法が埋め込まれている。

「相手の言葉」を完全に理解するのは無理だ。一生かかってもそんな「技能」は身につかない。しかし、少しだけ賢くなった人類は「相手の言葉を勉強する」過程で学んだのである、言葉が伝わらないのはあたりまえだ、ということ。

言葉はつねにずれる。誤解される。伝わらないのがふつう。相手の言葉は、永遠に相手の言葉なのであり、自分の言葉と完全に重なることはない。

これは物と言葉の関係でも同じだ。科学の発達で、私たちは世界のすべてを言語化し、説明してしまえるような気分になった。しかし、新型コロナウイルスの到来でもはっきりしたように、それは幻想だ。物とすっかり一対一で対応して、すべてをきれいに説明できる言葉などない。物どころか、人間の心だって不可解なことだらけである。言葉にできることはたかがしれている。

言葉を使うとは、まさにそういう場で格闘するということなのである。自分の言葉がそのまま相手に届くという期待は捨てた方がいい。言葉ですべてを解き明かすのも無理だ。意思疎通にまったく無駄のない究極のウルトラ・コミュニケーション法などもない。誤解されたり、ずれたり、とらえそこねたりする言葉を、何とかして届ける。あるいは聞き取る。全部ではなく

ても、八割、いや半分でもいい。

私たちはつい言葉に「強さ」を求めがちだ。「全部伝えたい」という気持ちは、このように言葉を強力な武器のように使おうとする気分とつながっている。強く、効果的に、説得力をもって語り、相手にうんと言わせたい。語ることによって相手を支配したい。そういう言葉の使い手が偉いと思っっている。それを、すごい、と賞賛する。

しかし、言葉は本来的に弱いものでもある。だから伝わらない。そこをやっと何とか乗り越える、というふうに考えるべきだろう。言葉が故障したり、病んだりするのはあたりまえなのである。

とはいえ、賢い人類は知っている。言葉には、弱さゆえの力がある。その細身と、やわらかさを生かして、薄暗い心の隙間や、物と物の隙間に入りこみ、とんでもない宝物を発見することができる。かと思うと、「まさかそんなふうに言うとは！」と奇跡的な形で世界をつかまえてたりする。

本書に収めた三一篇の文章は、いずれも言葉のそうした側面について語ったものばかりである。弱く、不安定で、しばしば失敗し、ずれることの多い言葉の背後には、同じく弱く、不安定な人間の本性がある。興味深いのは、弱さを抱えた人ほど、しぶとく周到で魅力的な表現者になるということである。近代英文学の世界では、心や身体の失調が作品内で語られることが非常に多かった。一八世紀の英文学ではメラニコリーが流行病になったと言われるほどだ。日本文学でも多くの文章に何らかの「失調」が反映されてきた。表現者には病の香りが付きま

うのである。

言葉は毒にも薬にもなる。病を抱えた言葉はそれゆえに癒やしをもたらすこともあるだろうが、さらに病を広げてしまうこともある。取り扱い注意なのは間違いない。しかし、私たちが言葉を使って生きていかなければならない以上、言葉にさらされ、その危険や魅力と出会いながらやっていくことは回避不能の必然なのである。言葉の病がまるでないもののように、知らぬふりを決め込むことなどできない。ちょうど人間などいなかのように振る舞うことができなれないのと同じように。これは自分が数字だけの世界に住んでいると信じる人にも適用されることだ。

本書は六つのセクションに分かれている。各部のはじめに説明をつけたので、興味をもったセクションから読んでいただければ幸いである。もちろん全体を一気読みしていただいても私としては嬉しいが、まずは気分と都合に応じて気に入ったセクションからページを繰っていただければいいと思う。

その上で、あえて言えば、第1部冒頭に収めた「言葉は技能なのか」は短いものでもあり、本書全体の前提をとらえるためにも、ぜひ目を通していただきたい。その後、第1部、第2部は広く言語と教育や社会の問題を扱っており、それほど深くコミットしなくても中に入っていると思う（変な言い方だが）。

著者として、「ここは何としてもいざずれば読んでほしい」と願っているのは第3部である。

本書の幹となる部分であり、ここから枝葉のように各部・各章が広がっていく。鷗外と漱石と太宰と西脇。どの章もちょっと重いかもしれないが、どうぞよろしくお願いします。

第4部、第5部では、「何とか伝えること」、「受け継ぐこと」が主眼となった。たしかに言葉は伝わらないことが多いが、一度で伝わらなければ、もう一度言ってみればいい。あるいはレーのバトンのように、誰か他の人が受け継いで、灯を絶やさなければいい。批評の役割は、そのように語られたものをさらに語り継いでいくことだ。その過程でオリジナルのものに生命が吹き込まれることだってあるだろう。

第6部もその延長だが、ここではあえて、語りにくい作家たちをとりあげた。大江健三郎とカズオ・イシグロはノーベル賞を受賞したことで誰よりも名が知られた作家となったが、実際には彼らの作品について語るのとは簡単なことではないと私は思っている。これまで何度か大江について書いてきたが、毎回、挑戦者の気持ちになる。